研究課題　中･近世畿内寺院史料の調査･研究と研究資源化－般若寺および念仏寺を中心とする－

研究経費

研究組織

　研究代表者　　　服部光真（公益財団法人元興寺文化財研究所）

　所内共同研究者　藤原重雄・遠藤基郎

　所外共同研究者　澤井廣次（天理大学附属天理図書館）・三宅徹誠（公益財団法人元興寺文化財研究所）

研究の概要

（１）課題の概要

歴史的に有力な寺社が集まる奈良・大阪地域では、各研究機関や自治体などによって寺院資料の調査が個別的に進められてきたが、今なお多くの史料が未調査、未紹介のままとなっている。古代以来、中・近世を通じて日本仏教の一大拠点であり、また寺院を核として形成された各地域社会や歴史都市の奈良を抱える大和・河内・和泉の宗教史、中・近世史研究の進展のためには、中小規模の寺院を含めた未紹介史料の研究資源化が不可欠である。  
　本研究では、奈良市内の真言律宗般若寺・浄土宗念仏寺の所蔵する資料を対象に、近年の寺院史料論・宗教テクスト研究の成果を踏まえて聖教類を含めた未紹介の中近世史料を悉皆的に調査し、これらの宗教史・仏教民俗関係史料と相互補完的な関係にある史料編纂所収集の中世史料および金石文拓本史料と合わせて、中近世の宗教史研究・寺院史研究の立場から各寺院史料全体の性格についての総合的な研究を行う。調査成果は、目録化と史料編纂所での画像公開によって、学界共有の研究資源化を図る。

（２）研究の成果

般若寺所蔵の古文書・聖教の調査では、叡尊願文写本のような断片的に知られてきた中世文書のみならず、中・近世史料（指定品・一切経を除く）を悉皆的に対象とし、目録・解題として公刊し、伝来してきた中・近世の古文書・聖教を群として把握することが可能となった。古文書・聖教は資料番号で62件に整理し、他に版木13点があり、細目総計97点となった。  
　近世の般若寺村の検地帳や村絵図・境内絵図、また聖教類には未紹介資料が多く含まれ、近世の般若寺村・般若寺について、奈良近郊の農村史、律院史の一事例として多くの新知見が得られた。その他、中世般若寺の特徴的な動向を示す文化財としてよく知られる十三重石塔や笠塔婆の伝来や修復に関わる近世・近代の史料についても、写真撮影によって全文が確認できるようになり、それぞれの文化財の再評価にもつながりうる成果が得られた。とりわけ笠塔婆の銘文については、現状では石材の劣化により全文の解読が困難であるが、過去の解読例の検討を進めていく。  
　調査資料については、東京大学史料編纂所内の端末での画像データ閲覧に供する準備を進め、目録・解題の刊行と合せて研究資源化についても目的を達した。  
　また関連して、史料編纂所にて採訪していた個人蒐集文書に、般若寺旧蔵史料が見いだせた。般若寺所蔵の文禄・慶長期の検地帳よりも遡る大永期の収納帳であり、都市奈良でとりわけ大きな役割を担っていた中世段階から、近世へと移行していく時期における般若寺の動向や社会的基盤を知りうる貴重な史料である。調査した般若寺所蔵資料とも密接不可分の内容を有する本史料の存在を検討対象として共有でき、合わせて検討する条件が得られたことは、共同研究として遂行した利点である。研究期間も年度繰越しとなったので2021年度にも引き続き分析を深める。